HCニューズレター

No.15

Human Care News Letter

2014年3月 日本ヒューマン・ケア心理学会

学会新体制の発足

会長に選任されて

日本赤十字看護大学教授　遠藤　公久

このたび、小玉会長に代わり、次期会長に選任されました。本学会創設以来この15年間、岡堂先生、そして小玉先生と、偉大なる諸先輩が本学会を強力に牽引してくださいました。この大役をお引き受けすることに躊躇いたしましたが、その一方で次世代へ引き継ぐ義務も感じました。もとより微力ですが、少しでもお役に立てるように頑張りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、任期中は、当然のことですが、学術活動をさらに活性化することを目標にしたいと思います。具体的には、学会誌の充実、研修会の拡充、そして会員数増加に向けた広報活動の推進などがあげられます。

学会誌は各学会の学術的独自性や方向性を示す意味で重要な財産です。学会誌を充実させるためには、審査のさらなる迅速化、投稿数の増大、そして論文の質的向上が求められます。そのために、編集委員会を拡充し、また投稿しやすい環境づくりに力を入れます。また、研修会の充実のためには、研修内容はもちろんのこと、研修参加が他の資格更新（例えば臨床心理士）のポイントになる認定制度、本学会独自の資格制度などの導入も検討していく必要があります。しかし、こういった新しい制度の導入は、決して平坦な道のりではありません。その実現可能性を模索し、検討を重ねていきたいと思います。また、本学会は小規模ゆえに、会員一人ひとりの顔の見える、手作り学会という特長があります。しかし、学会のさらなる活性化のためには、やはり会員数の増大が不可欠です。そのためには、本学会の存在をさらに多くの人に知っていただく広報活動が大切です。例えば、互恵性の期待できる他の諸学会との合同学術集会の開催、研修会の公開化などもあげられるでしょう。本学会は、専門の異なる研究者や実践家が、ヒューマン・ケアをめぐって叡智を結集させていこうという高い志のもとに創設されました。少しでも多くの分野から関心を持たれる学会を目指していきます。

最後に、「人間の健康と福祉の向上に向けた支援」のために本学会が社会にいかなる貢献ができるのか、15歳を迎えた本学会のアイデンティティが今後問われてきます。会員皆様一人ひとりにとってさらに貴重な学会になるためにも、忌憚ないご意見を賜りますよう、よろしくお願いいたします。



日本ヒューマン・ケア心理学会
第3代会長 遠藤公久先生

日本ヒューマン・ケア心理学会 第6期役員

会長　遠藤　公久　日本赤十字看護大学

理事　※安保　英勇　東北大学
※石川　智　杏林大学
※伊藤　まゆみ　共立女子大学
伊藤　美奈子　奈良女子大学
※岩崎　祥一　東北大学
上野　徳美　大分大学
梅村　美代志　昭和大学
長田　久雄　桜美林大学
片山　富美代　桐蔭横浜大学
※小玉　正博　埼玉学園大学
※木村　登紀子　いちかわ野の花心理臨床研究所
佐居　由美　聖路加看護大学◇
※清水　裕子　香川大学
菅　佐和子　関西看護医療大学
鈴木　玲子　埼玉県立大学
竹田　真理子　和歌山大学
中原　るり子　東邦大学
森　和代　桜美林大学
山崎　登志子　広島国際大学

監事　島井　哲志　日本赤十字豊田看護大学
志賀　令明　福島県立医科大学

顧問　岡堂　哲雄　聖徳大学

以上、あいうえお順　※常任理事
◇4月から聖路加国際大学に改名

死別後もつづく絆

日本ヒューマン・ケア心理学会第15回大会を終えて

聖路加看護大学　堀内 成子

日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第15回大会を2013年7月6日・7日、東京築地の聖路加看護大学において開催いたしました。一日目の学術集会には167人（会員73人、非会員67人、学生27人）、二日目の研修会は65人の参加者にお集まりいただきました。「死別後もつづく絆」を大会テーマに、学問領域をこえて「ヒューマン・ケア」の可能性を模索しました。

一日目の学術集会には、67題（口演26題、ポスター41題）の一般演題をお寄せいただきました。多くの会員の皆様、新たに学会員になってくださった皆様に心よりお礼申し上げます。プログラムは、大会長講演として、「死別後も続く絆ー天使の保護者ルカの会の活動からー」と題して、地域での周産期喪失後の母親と家族への支援と課題について報告いたしました。続いて教育講演として、米国パロアルト大学大学院の臨床心理学教授のフィールド博士より「死別と悲嘆を愛着理論から理解すること」のご講演いただきました。喪失後の新しい人生の再構築の過程において、「故人との関係を外の関係から内なる関係へ」と変化させることが回復の鍵であると長年の研究からご教示いただきました。お昼は、ラウンジで6団体のセルフヘルプグループの展示を見て頂く機会を設けました。午後の口演は【絆】【学校】【看取り】【変化】【困難】【成長】の6グループ27演題、ポスター発表は【ケアする人の課題】【ケアを創ること】【心模様】【ケアへの希求】の4グループ41演題の発表が行われました。

午後の特別講演は、小児がんの治療とケアに長年携わっていらした聖路加国際病院小児総合医療センター長の細谷亮太先生からの「愛しい人を失うとき」の講演でした。ご紹介いただいた映像には、子どもが自分のいのちの終わりを悟り、家族・医師ともに悩みながら暮らす道程、諦められない思い、決定する潔さ、誰かのために自分が生きることの意味、ミッションの終わり等の複雑な思いが描かれ、涙なしには学ぶことはできない時間でした。

研修会は、聖路加看護大学麻原きよみ教授の「エスノグラフィー：データ収集および分析方法の実際」でした。たくさんの実例を提示していただき、司会の井部俊子学長との掛け合い漫才のような質疑応答により理解を深めることができました。

学会後のアンケートでは〈とても刺激になりました〉〈これからもグリーフケアに関わりたい〉〈エスノグラフィー大変興味深くわかりやすかった〉〈細谷先生のお話に涙が止まりませんでした〉〈私自身がケアされたような一日となりました〉とあり、8割以上の方から高評価をいただきました。

学問分野の異なる専門職が集まりヒューマン・ケアについて語り合い交流する。なんと素晴らしいことだろう。残念なことに特別講演にいらしたフィールド教授は、帰国後病に倒れ12月にご逝去なさいました。亡くなった人への思いは、永遠に心の中に。



大会会長と学会会場（聖路加看護大学）

教育講演

“Continuing bonds In bereavement: An attachment theory based perspective”

パロアルト大学大学院　Nigel P. Field

Nigel P. Field先生は「死別後も続く絆」について、愛着理論の観点からお話されました。先生は、カンボジアでのポルポト政権下における大量虐殺や、水祭りでの将棋倒し事故による遺族の悲嘆と喪失について研究されており、今回の講演では、現地での遺族へのインタビューから、様々な調査結果や事例を取り上げられました。

先生のお話の中で印象的だったのは、愛着理論に基づく悲嘆のプロセスは、伝統的な死別研究におけるプロセスと異なるといった見解でした。従来の死別研究において、悲嘆のプロセスは、故人との絆を切ることにより成功するといわれています。しかし、愛着理論に基づく悲嘆のプロセスでは、故人との愛着関係や絆を新たに再編していくことが成功につながるということでした。絆の再編について、先生は、大切な故人の価値観や特性を自分の中に取り入れることや、心の中で故人との関係性をつくること、また、最終的には大切な人の死を肯定的に受け止めることなどを、重要な要素として挙げていました。死別によって故人との絆を切るのではなく、新たに再編していくというプロセスは、本大会のテーマである、「死別後も続く絆」をより明確に具体的に示すものとなりました。

先生の調査結果の中に、大切な人との死別後に適切に絆を再編できた人は、生前に安定した愛着関係を築いていたというものがありました。この結果から、死別後に留まらない、生前からのグリーフケアの可能性や、ヒューマン・ケアといった総合的な視点の必要性を感じました。今後、これらの調査結果や具体的な事例を、臨床でどのように活用していくのか、興味深い課題となりました。

（聖路加国際病院　大川 智子）



教育講演　Nigel P. Field先生

特別講演

「愛しい人を失うとき」

聖路加国際病院
小児総合医療センター長　細谷 亮太

聖路加国際病院小児総合医療センター長である細谷亮太先生が「小児科医から見た生と死」という副題で講演されました。大人と違って子どもは死ぬ存在ではない人達であるにもかかわらず0歳から20歳未満までの年間死亡数は５０００人であり、その内２０００人は1歳までに亡くなっているという現実に周産期医療に携わっている者としては衝撃でした。小児の年代別でも死因の上位を占める悪性新生物は、40年前までは救命できず、そのため子どもは死んではいけないけれど死ぬ存在とならざるを得なかったようです。細谷先生自身も１９７２年頃は、日常子どもの死を臨床で多く経験しながらもグリーフケアなどは考えなかったと話されました。けれどもアメリカでは治せないのであれば緩和ケアをという動きがあり発展してきました。緩和ケアの場としてのホスピスは、大人は亡くなる場所であるけれども、子どもの場合は楽しかった場所として思いを強める場所として位置づけられているということは新たな知見でした。講演中、延命治療を拒否して家族と共に最後まで暮らすことを選択した一人の少女のＤＶＤが流されました。「命は長さじゃないよ、どう生きていくかだよ」と延命治療を勧める両親に言った少女の言葉、そして大事な人とさよならするということがそれぞれの人にどのような思いをもたらすのか、少女のメッセージとして深く心に圧し掛かり考えさせられる映像でした。死んでなお父と母には思い出が残り、関った人や映像を観た人、知った人から便りが来たりする、それが亡くなった人からのメッセージとして捉えるかは、その人の



特別講演　細谷亮太先生

気づきによると細谷先生から教わりました。ヒューマンケアで大切な事は、気付いて、その事に共感して、感動して、そしてアクションを起こすことであると細谷先生は自身の考えを述べられました。理解しているようで実際に言葉に表してみるとアクションを起こすまで至っていない日常のケアを反省し今後のケアの活かしていこうと誓った意義ある講演でした。

（大阪赤十字病院　中川 有加）

研修会参加者の感想

「エスノグラフィー：データ収集および分析方法の実際」

聖路加看護大学教授　麻原 きよみ

研修会は大会2日目に行われました。麻原きよみ先生は、ある特定集団の人々に共有された知識、信念、価値観とそれに基づく生活の仕方を文化ととらえ、その文化を理解する方法論がエスノグラフィーであるということについて、ご自身が保健師だった頃のご経験に基づく研究事例を示しながら、プロセスを追ってご講演くださいました。

研究者の五感で感じたものすべてが分析データになるエスノグラフィーは、五感で感じた事象を文字化することが重要であり、欠かすことなく文字化するためには記憶が鮮明な時間との勝負であると、研究上の難しさも交えた説明は、臨場感にあふれるものでした。また、得られた記述データのカテゴリー化において、コードの内容を網羅することではなく、コードに共通した意味を凝縮して表現することが大事であること、その結果、心を揺さぶられる、生き生きとした表現は、既成概念にとらわれることのない、新しい概念

日本ヒューマン･ケア心理学会第15回大会当日の様子













や解釈をつくりだすことができることなど、質的研究全般に通じるエッセンスも含め、ご説明くださいました。さらに、麻原先生と本研修会座長の聖路加看護大学学長である井部俊子先生との掛け合いは、他の研修会では見られない光景であり、こうした研修会全体の雰囲気が活発な質疑応答にもつながり、3時間の研修会はあっという間でしたがズッシリ重みのある貴重な時間となりました。

研修に参加して、研究者の五感を使うためには、研究者自身がその感度を高めていなければならないと認識するとともに、研究することは、日々の自身のあり方も問われることになり、精進しなければとあらためて考えることになりました。

（東京工科大学　金子 多喜子）



研修会の様子

第15回優秀発表賞（口頭部門）を受賞して

奈良女子大学　伊藤 美奈子

今学会の発表テーマは「不登校タイプにより過去の支援や不登校に対する評価は異なるか？―こもることの意味を考える」でした。ここ数年、いくつかの学会で不登校関係の発表を行ってきました。〈不登校の葛藤と成長（葛藤があるほど、心理的な成長も大きい）〉〈不登校の過去・現在・未来（現在のあり方と過去の見方、過去の見方と将来展望は関連する）〉〈不登校と自尊感情との関連（不登校の過去の有無に関わらず、高校入学後の自尊感情に差はない）〉等々。これら一連の研究は、不登校という〝陰〟の部分に光を見つけたいという思いから出発しています。今年の発表では、不登校＝〝こもること〟の意味を考えました。調査結果より「〝殻〟にこもる時間は苦しい半面で、成長にもつながる」こと、しかし「その〝こもる〟時間を支える手が必要である」ことが示唆されました。

私は、大学卒業後すぐに高校教師になったのですが、担任クラスでの不登校生徒との出会いが、心理学に足を踏み入れる大きなきっかけとなりました。その後、大学院に戻り勉強させていただいた臨床心理相談室や不登校通所施設、さらにスクールカウンセラーとして関わった学校現場で、多くの不登校児童生徒と保護者、そして、その子どもを支える先生方と出会いました。その20年あまりの間に不登校そのものはどんどん多様化し、支援も心理臨床の枠を超えた技法やネットワークが求められるようになっています。今後も、不登校に〝光〟を見つけられるような研究・支援を続けるために精進していきたいと思います。本当にありがとうございました。

第15回優秀発表賞（ポスター部門）を受賞して

町田市教育センター
特別支援教育巡回指導員　一神 佳代

この度は、第15回大会ポスター部門で優秀発表賞を頂けたことを大変光栄に思っております。そしてこの場を借りて、研究のご指導をして下さった東京成徳大学の石村郁夫先生、共に切磋琢磨しながら研究を行ってきた東京成徳大学の石村研究室の皆様にも心より感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

本研究では、介入群の大学生42名に他者への尊敬を高める介入として、身近な他者（親、友人、先生など）7人について1日1人ずつ5項目の尊敬できるところを挙げてもらうワークを実施致しました。その結果、介入群の他尊感情が有意に高くなり、また攻撃性の中の敵意も有意に軽減されることが示されました。更にそのことによって被受容感や自尊感情も有意に高くなることも示されました。この結果を通して、近年教育的問題でもある、いじめや対人暴力などの攻撃性の問題についても有効な示唆が示されました。

今回、研究で取り上げた〝尊敬〟は、他尊感情（石川・石隈・濱口、2005）の概念をもとに尊敬を〝親や友人など普段の生活で会う身近な他者に対して、尊重し、受容し、思いやり、価値あるもの〟と定義し、他者承認としての尊敬としました。私自身も現在教育の現場に携わる中で、他者を大切にできる心を育むことが、子どもたちの成長にも欠かせないものだと痛感しています。

今後は、現場のニーズも踏まえた上でのより良い研究ができるように、研究の改良、実施上の工夫などを行い、現場で活かせる研究を目指していきたいと思います。

日本ヒューマン・ケア心理学会 第16回大会のお知らせ
（日本交流分析学会第39回学術大会と合同開催）
〈ヒューマンケアと看護学〉

日程：2014年9月13日（土）・14日（日）
会場：サンポートホール高松
〒760-0019 香川県高松市サンポート2-1
TEL：087-825-5000 FAX：087-825-5040

大会テーマ：「ヒューマンケアと看護学」

・特別講演　「日本におけるスピリチュアルケア普及活動からの提言」
ワルデマール・キッペス先生（臨床パストラル教育研究センター理事長）

・シンポジウム「生活習慣病ー糖尿病患者のセルフマネージメントへのアプローチ」
徳田雅明教授（香川大学医学部細胞情報生理学・希少糖研究センター所長）
宮武陽子教授（高知県立大学看護学部・看護学研究科 慢性期看護学教授）

・ラウンドテーブル テーマ「学会認定の資格を考える」
座　長　長田久雄教授（桜美林大学大学院）
コメンテーター　江花昭一教授（神奈川大学 保健管理センター センター長）［日本交流分析学会］
討論者　中込さと子教授（山梨大学医学部看護学科 成育看護学講座）助産師の立場から
菊池和子教授（岩手県立大学看護学部）看護師の立場から
竹澤みどり講師（富山大学保健管理センター）学校相談の立場から

・研修会（原則として事前申し込み・当日参加も受付。会員には修了証を発行）
講　師　戈木クレイグヒル滋子教授（慶應義塾大学看護医療学部／健康マネジメント研究科）
「グラウンデッド・セオリー・アプローチの方法」

・第2回学会論文賞授賞式および講演会

今後のスケジュール
1. 演題申込み期間　2014年4月2日（水）～5月28日（水）
2. 抄録原稿提出　2014年5月28日（水）23：59
3. 参加申し込み　2014年8月29日（金）23：59

■参加費は当日支払い（当日参加費）のみ ■申込者への抄録集の事前発送はありません。

大会HP　http://www.med-gakkai.org/jsta-jhc2014/
大会事務局：日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第16回大会 事務局
香川大学医学部 看護学科成人看護学
〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1
TEL：087-898-5111 FAX：087-891-2016
E-mail：human16@med.kagawa-u.ac.jp
運営事務局：日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第16回大会 運営事務局
株式会社メッド 担当：板谷、小川
〒701-0114 岡山県倉敷市松島1075-3
TEL：086-463-5344 FAX：086-463-5345
E-mail：jsta-jhc2014@med-gakkai.org（合同学会共同専用アドレス）

第16回 大会準備委員会委員長：清水 裕子（香川大学）

「ヒューマン・ケア研究」投稿論文募集

執筆要領が改訂されております。ご注意いただきたい点は①論文の種類に短報（short reportが追加されたこと（英文アブストラクトは不要、お気軽に投稿ください）②英文アブストラクトについて校閲の証明書を提出すること（HPからダウンロードできます）の2点です。どうぞ、ご注意ください。

（編集担当 遠藤公久）

Web担当からのお知らせ

学会のWebサイトが下記に移動し、ホームページが刷新されました。是非、一度ご覧ください。
http://www.j-hc.jp
なお、現在会員向けに限定したサービスとして「ヒューマン・ケア研究」に掲載されている原著論文（2000-2011 No.1）がWebからダウンロードできるようになっております。ご利用下の際には以下のIDとパスワードを入力する必要があります。なお、パスワードは、会員以外にはお知らせにならないで下さい。
ID:ICkaiin2014　パスワード:AyDzXcR4
なお、このID及びパスワードは、2014年4月1日より有効となります。それまでは前年度のID及びパスワードをお使い下さい。

（Web担当 岩崎祥一）

編集後記

広報担当を2期6年間務めましたが、No15を以て新しい常任理事にバトンタッチいたします。これまでの、ご協力と暖かいご交誼にお礼を申し上げます。

（広報担当 廣瀬清人）

●役員改選にともなって、学会事務局と学会誌編集事務局は当面の間、いずれも下記の住所になります。

●学会事務局・学会機関紙事務局
〒150-0012 東京都渋谷区広尾4-1-3
日本赤十字看護大学 遠藤公久研究室気付
日本ヒューマン・ケア心理学会事務局
E-mail：humancarepsy@redcross.ac.jp
TEL（ダイヤルイン）：03-3409-0914（FAX共）

